

# 巻 頭 言

## 私の動物実験と実験ノート

仙台青葉学院短期大学学長  
藤 村 重 文

2014年1月29日 NATURE 電子版に発表された“Stimulus-triggered fate conversion of somatic cells into pluripotency”という研究原著論文の内容に疑義があることが指摘され、その著者による研究結果の改ざんを含めて真偽がマスコミでも大きく報道されている。論文のタイトルに書かれた細胞は、分化した体細胞が刺激によって様々な細胞に変わる能力を持つようになる刺激惹起性多能性獲得細胞（STAP 細胞）という第3の万能細胞といわれる細胞である。将来様々な細胞に分化しうるものとして、これまで ES 細胞（胚性幹細胞）や iPS 細胞（人工多機能幹細胞）が証明されている。現在ほぼ連日大きくセンセーショナルに報道されているのは、この研究成果が真実であればそれだけ世界で初めての画期的なためである。若い女性研究者が論文の発表者である。将来この研究者の発見が真実か否かは、本研究がほかの研究者によって追試されて、同じ結果が再現されるか否かにかかっている。

筆者がこの研究結果の発表に初めて関心が向いたのは、新聞紙上の NATURE に掲載されたという並列された二枚の蛍光画像を見た時であった。理研の調査委員会が博士論文の画像と酷似しているため捏造と認定したその緑色の美しい蛍光画像は、筆者にも確実に特異的所見を示していると見えた。一方発表者が「本来論文に掲載すべきであった正しい画像」は蛍光も弱く、特異的所見を示しているようには見えなかった。

筆者は肺移植の学位論文終了後、未知の研究分野である拒絶反応の組織免疫学的研究に進むために、当時の東北大学口腔細菌学講座日沼頼夫教授と葉田野玲博士のもとに文字通り弟子入りしてご指導をいただいた。約2年後「肺移植に関する免疫組織学的研究Ⅰ．抗イヌ免疫グロブリン抗体の調整」と「同Ⅱ．蛍光抗体法による免疫組織学的検討」の論文2編を移植学会雑誌「移植」に発表した。蛍光抗体の作成から組織染色まですべて自前で行い、その時に厳しかった日沼教授のお許しがでたその蛍光写真の特異染色像と、本文の NATURE 掲載写真がよく似ていたのである。細菌学教室に入り浸った40年以上前の記録は今や霧散しているが、その期間中の実験ノートは4～5冊にはなかったのではないかと思う。特に外科臨床に携わりながらの不慣れな細菌学教室での研究生生活であったため、教室先達の言葉や行為なども記録した覚えがある。

二度とない大切な実験や研究に際して記録するノートがあまり残っていないということは考えられないのである。

STAP 細胞が存在するという真実の知見に近い将来得られることを切望しながら本稿を終えたい。